

資料・研究ノート

ビルマ国軍史(その2)

大野 徹*

A History of the Burmese Army (Part 2)

by

Toru OHNO

(4) ビルマ防衛軍(BDA)への改編

1942年3月10日、ラングーン陥落の二日後であった。第15軍司令官は「軍政部」の編成を命じ、参謀副長的那須義雄大佐が軍政部長としてその編成に着手した。²⁶⁰⁾ ビルマにおける日本軍の占領地行政はこうして始まった。

一方南機関では、BIA とタキン党とを指導して各地に治安維持会、村落行政委員会、郡行政委員会、県行政委員会、市行政委員会等の組織を作り治安確立に努めた。²⁶¹⁾ 南機関の鈴木敬司大佐(BIA 司令官ボウ・モウヂョウ)は、3月23日軍司令部の了解の下に、「ビルマ政府」設立計画を発表した。この政府は「ビルマ・バハウ(中央)政府」とよばれ、4月7日発足した。「志士三十人」の一人タキン・トゥンオウが、新政府の行政主席に就任した。²⁶²⁾

ビルマ全土が日本軍の支配下に入った5月5日、アウンサンはビルマ独立軍上ビルマ進撃軍司令官ボウ・テーザの名前で、次のような命令を下した。²⁶³⁾ それは、BIA の政治介入を厳しく戒める内容のものであった。

「ビルマ独立軍は、今後政治、行政に関して一切関与しない。ビルマ独立軍の将校および兵士は、政党政治ならびに行政問題には手を出してはならない。違反者は嚴重に処罰される。われわれは、ビルマ国の独立、統一に重点をおいている。ビルマの国政については、日本軍司令官がビルマの指導者達と協議しすでに準備委員会を設置した。行政に関する責任は、もはやわれわれにはない。もし行政権について依頼を受けるようなことがあれば、直ちに関係当局に報告せよ。軍が独断で権限を行使してはならない。」

* 大阪外国語大学ビルマ語学科

260) 太田, p. 46; 『ビルマ攻略作戦』 p. 506.

261) Hla Myo, p. 148; 太田, p. 46.

262) U Hla, Vol. 1, p. 53; Hla Myo, p. 148; Cady, p. 442; Ba Maw, p. 173.

263) U Hla, Vol. 1, p. 196; Ba Maw, pp. 214-215.

北伐作戦終了後の5月末、ビルマ独立軍がバモーに集結した時、その兵力は3万人を下らない²⁶⁴⁾と推測された。特に、護郷軍は膨大な数になっていた。²⁶⁵⁾ 急激な膨張の過程では不純分子の混入が避けられず、ついにはBIAの名称を悪用する者さえ現われるようになった。²⁶⁶⁾ アマラプーラに本部を置いていたビルマ独立軍司令部は、5月27日ボウ・バティンの名で次のような布告を出している。²⁶⁷⁾

「地方にある各種の防衛組織、歓迎機関、ドウバマー・アシーアヨンなどは、“ビルマ独立軍”ではない。軍隊とは真の武装軍のことである。従って、司令部の許可なく勝手に“軍隊”という名称を使用している者は、自己の責任において用いているにすぎない。軍隊名の使用について違反する者は、軍法に基づき厳重に処罰される。」

このように、ビルマ独立軍と日本軍の占領地行政との間に摩擦が生じてき²⁶⁸⁾、地方行政にたずさわっているBIAの問題が重大化してきた。²⁶⁹⁾ いわば、ビルマ独立軍の統制と補給問題とが、この頃になってようやく表面化してきたと言ってよい。ビルマ独立軍はもともと“正規軍”ではなく、南機関の指導の下に結成された一種の“義勇軍”にすぎなかった。しかもそれは、数ばかり多くて基礎訓練もろくに受けていない“寄せ集め”の兵士から成っていた。日本軍としては、ビルマの軍政が軌道に乗った以上、軍政に批判的な²⁷⁰⁾この義勇軍を解散させる必要があった。こうして、日本軍司令官指揮下の「ビルマ正規軍」の編成計画が進められた。²⁷¹⁾ まず、ビルマ独立軍を指揮してきた南機関の鈴木大佐が、42年6月付で近衛師団司令部付に発令された。²⁷²⁾ 鈴木大佐は、7月5日ビルマ独立軍の指揮権をテーザ中將（アウンサン）に委譲した²⁷³⁾ 後、7月14日ビルマの軍官当局者に惜しまれながら帰国した。²⁷⁴⁾ その他の南機関員達も四方に転属になり、ビルマ独立軍の生みの親、育ての親としてビルマ現代史に大きな足跡を残した南機関は、ここに自然消滅した²⁷⁵⁾のである。

アウンサン中將は、7月8日各地のBIA部隊に対し、次のような集結・解散命令を下した。²⁷⁶⁾

- 1) このたび独立軍を解散して、世界的水準の軍隊を編成することになった。希望者には引き続き入隊を認める。一身上の都合その他の理由で、除隊を希望する者は帰郷してよい。

264) U Hla, Vol. 1, p. 53.

265) 『ビルマ攻略作戦』 p. 449.

266) Bo Than Daing, Vol. 1, p. 131; U Hla, Vol. 1, p. 266.

267) U Hla, Vol. 1, p. 173.

268) 『ビルマ攻略作戦』 p. 449.

269) 太田, p. 48.

270) Bo Thein Swe, p. 164; Bo Than Daing, Vol. 1, p. 139; 太田, p. 340.

271) 太田, p. 449.

272) 泉谷, p. 214; 『ビルマ攻略作戦』 p. 450.

273) U Hla, Vol. 1, p. 236; 『ビルマ攻略作戦』 p. 451.

274) U Hla, Vol. 1, p. 236.

275) 泉谷, p. 214.

276) U Hla, Vol. 1, p. 265; Bo Than Daing, Vol. 1, pp. 136-137 に全文が掲載されている。

- 2) 除隊を希望する兵士に対しては、一人当たり百チャットの費用を支給し賞状を渡して帰郷させよ。
- 3) 継続入隊を希望する兵士に対しては、資格審査の上所属部隊と階級を定める。
- 4) 継続入隊希望者の名簿を作成送付せよ。

命令を受けた各部隊は、マンダレー、ペゲー、ミンガラードンに集結²⁷⁷⁾、タウンヂーその他の不正規軍は解散した。集結した推定7, 8千の兵士の中から日本の徴兵検査に準じ、19歳未満および23歳以上の者、学力が小学卒以下の者を除いて、2, 800名の精鋭が選抜された。²⁷⁸⁾「ビルマ防衛軍」(BDA) は、1942年7月27日こうして編成された。²⁷⁹⁾ 編成当初の「ビルマ防衛軍」幹部(8月1日付で発令)は、次のとおりであった。²⁸⁰⁾

司令部	軍司令官	アウンサン大佐*
	参謀長	セッチャー中佐*
	高級副官	レッヤー中佐*
	参謀	ポウクン大尉(後、白色 PVO の指導者、駐ソ大使、1970年6月死亡)
	徴兵局	キンマウンガレー大尉(後、AFPFL 閣僚)
	第1大隊 大隊長	ネーウィン少佐*
	副官	ラヤウン大尉*
	第1中隊長	モウニョウ大尉*
	第2中隊長	タンダイン大尉(後、少佐、退役)
	第3中隊長	ソーナウン大尉*
第2大隊	第4中隊長	バラ大尉*
	機関銃中隊長	イエートウツ大尉*
	大隊長	ヤンナイン少佐*
	副官	アウン大尉*
	第1中隊長	タウテイン大尉*
	第2中隊長	バトゥー大尉(1945年6月病死)
	第3中隊長	ミンガウン大尉*
	第4中隊長	ミンヤウン大尉*
	機関銃中隊長	ミインアウン大尉*

277) U Hla, Vol. 1, p. 266.

278) Bo Thein Swe, p. 165; Sein Tin, p. 178, 太田, p. 48.

279) Thakin Lwin, p. 136; Hpon Kyaw, p. 188; Ba Thaug, p. 271; Maung Maung (1969), p. 194; 太田, p. 48.

280) U Hla, Vol. 1, pp. 250-252; Bo Than Daing, pp. 151-156; Bo Thein Swe, p. 165; Thakin Lwin, p. 137; Maung Maung, pp. 195-196; 太田, pp. 345-346; 『ビルマ攻略作戦』 p. 456.

第3大隊	大 隊 長	ゼーヤ少佐*
	副 官	ヤンアウン大尉*
	第1中隊長	チャーゾー大尉*
	第2中隊長	ペーテッ大尉（後、退役：現製麻工場長）
	第3中隊長	ジンヨー大尉*
	第4中隊長	ターヤー大尉*
	機関銃中隊長	ボンミイン大尉*

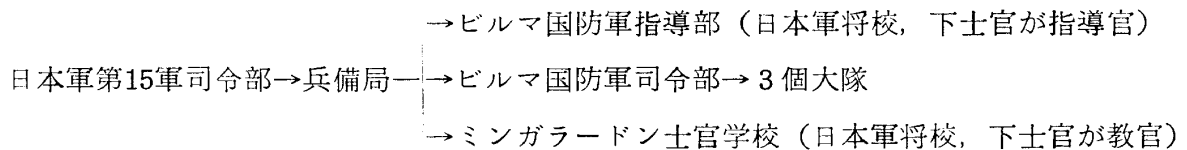
ビルマ防衛軍の幹部は、大佐が1名、中佐2名、少佐3名、「志士三十人」の残り（星印を付したもの）は全員大尉に任官された。²⁸¹⁾ 注目すべき点は、現在のネーウィン体制を支えている高級将校達が、この頃からようやく顔を出しはじめたことである。当時は、まだ下士官、よくてせいぜい尉官クラスにすぎなかったこれらの人物も、今では革命評議会員として、あるいはそれに準じた革命政府高官として著名な重要人物になっている。中にはネーウィン政権成立後失脚した者もいるが、いちおう著名な者だけ抜き出してみると次のようになる。

第1大隊	補 給 主 任	アウンダー中尉 （後準将，1962年革命評議会員，1963年解任）
	補 給 副 主 任	アウンシュエ軍曹 （後準将，現駐仏兼駐西大使）
	第1中隊小隊長	ティンドウ中尉 （後大佐，現駐イスラエル大使）
	〃	ティンマウン中尉 （後大佐，国防省兵站副総監，現駐中共大使）
	第4中隊小隊長	ティンペー少尉 （後準将，革命評議会員，1970年11月解任）
第2大隊	軍 医	マウンルイン大尉 （後大佐，現革命評議会員）
	小 隊 長	サンユ中尉 （後準将，現革命評議会員）
第3大隊	軍 医	フラハン大尉 （後大佐，現革命評議会員）
	軍 医	ティンアウン大尉 （後中佐，現革命政府厚生次官）
司令部	徴 兵 局	ルンティン中尉 （後大佐，元革命評議会員，IDC 議長）

281) U Hla, Vol. 1, pp. 251-252.

補給局	ウィン大尉 (後大佐, 現駐米大使館顧問)
動物部	チャー中尉 (後大佐, 前中央治安行政委員会副議長)
	マウンマウン大尉 (後準将, 現駐フィリピン兼駐インドネシア大使)
	バニー中尉 (後大佐, 革命政府運輸相, 現駐チェコ大使)

「ビルマ防衛軍」は、編成、装備、教育すべて一応整えられた「正規軍」であった。²⁸²⁾けれども、それは日本軍(第15軍)司令官 飯田中将に隷属し²⁸³⁾、司令部から大隊、中隊に至るまで、若松少佐、川島大尉、高橋中尉、土居中尉、鈴木中尉等「ビルマ国防軍指導部」の日本軍将校が派遣されている²⁸⁴⁾完全な日本軍指揮下の軍隊であった。これを図示すると次のようになる。²⁸⁵⁾



ビルマ防衛軍は創設当初、第1、第2、第3の歩兵3個大隊兵員3千名で²⁸⁶⁾、大隊は大隊本部、小銃4個中隊、機関銃1個中隊から成り、小隊はさらに3個小隊に分かれていた。²⁸⁷⁾その後1943年3月11日に第4大隊、16日に第5大隊、4月10日には第6大隊が追加編成されて²⁸⁸⁾、計6個大隊になった。²⁸⁹⁾増設3個大隊の指揮官は次のとおりである。²⁹⁰⁾

第4大隊	大隊長	チャーゾー少佐*
	副官	タンダイン大尉
	第1中隊長	ソーナウン大尉*
	第2中隊長	モウニョウ大尉*
	第3中隊長	ティンマウン中尉(現大佐)

282) 太田, p. 345.

283) Thakin Lwin, p. 136; Maung Maung (1969), p. 194.

284) Bo Than Daing, Vol. 1, p. 167; Bo Thein Swe, pp. 165-166; Thakin Lwin, p. 137; 泉谷, pp. 215-216.

285) Hpon Kyaw, p. 189; 太田, pp. 346-348; 『ビルマ攻略作戦』 pp. 453-455.

286) Thakin Lwin, p. 137; Hpon Kyaw, p. 189; Maung Maung (1969), p. 195.

287) Bo Than Daing, Vol. 1, p. 149; Thakin Lwin, p. 136; 太田, p. 345; 『ビルマ攻略作戦』 p. 455.

288) Thakin Lwin, p. 137.

289) Sein Tin, p. 188.

290) Bo Thein Swe, p. 170; Bo Than Daing, Vol. 1, p. 191.

第5大隊	第4中隊長	アウンミン中尉（後共産党，62年帰順）
	機関銃中隊長	オンシュエ中尉
	大 隊 長	アウン少佐*
	副 官	バラ大尉*
第6大隊	第1中隊長	バトゥー大尉（後病死）
	第2中隊長	フラペー大尉
	第3中隊長	ネーミョウ中尉
	第4中隊長	テインスエー中尉（後PVO）
	機関銃中隊長	バティッ中尉（現通産公社第4号）
	大 隊 長	ヤンアウン少佐*
	副 官	キンマウンレー大尉

増設3個大隊の小隊長には，ミンガラドン士官学校の第1期卒業生が配置された。²⁹¹⁾ その主な者は次のとおり。

第4大隊小隊長	ボウ・ソウフライン（現中佐）
	ボウ・イェーガウン（現中佐）
	ボウ・ミンテイン（現大佐）
第5大隊小隊長	ボウ・チッカイン（現労働省局長）
	ボウ・ポンチャー（後白色 PVO，帰順）
	ボウ・エーマウン（現駐在武官）

編成されたビルマ防衛軍各部隊の内，第1大隊はパンダウン・タウンゴウ路，第2大隊はラングーン守備，第3大隊は日本軍の上ビルマ作戦に参加，第4，5，6の増設3個大隊はピインマナーに駐屯した。²⁹²⁾ 既設の6個大隊はいずれも歩兵部隊であったが，後には各種の重火器部隊が新設された。その創設年月と編成は次のとおり。²⁹³⁾

創設年月	部隊名および編成	指 揮 官
1943. 5. 31	高射機関砲1個大隊（6中隊）	ミインアウン少佐*
1943. 7. 15	迫撃砲1個大隊（2中隊）	バトゥー少佐
	高射砲1個大隊（2中隊）	キンニョウ大尉（後大佐，1965年退役）
	工兵1個大隊（3中隊）	ラヤウン少佐*
	自動車部隊（1個中隊）	キンマウンレー大尉，セインティン中尉

291) Bo Thein Swe, p. 171; Bo Than Daing, Vol. 1, pp. 191-192.

292) Hpon Kyaw, pp. 190-191; Bo Thein Swe, p. 171.

293) Bo Than Daing, Vol. 2, pp. 276-277; Bo Thein Swe, pp. 173-174; 太田, p. 346.

通 信 部 隊	テインハン大尉
騎 兵 1 個 大 隊	ティンスエー大尉（現大佐）
衛 生 大 隊	マウンマウンヂー大尉（後大佐，退役）

ビルマ防衛軍の兵力拡充はその後も続けられ、歩兵大隊も最終的には7個大隊にまでふやされた。²⁹⁴⁾ BDA 兵士の入隊資格は次のとおりであった。²⁹⁵⁾

- 1) 年齢18才以上25才未満。学力不問。
- 2) 申請書受付—県庁，郡役所，町役場，警察署。
- 3) 取得権—制服および食事給付，傷病の治療，階級に応じた月給の支給，将校昇進の機会。

こうしてビルマ防衛軍の兵力は8千までふやされ²⁹⁶⁾，兵力面でも装備面でも充実した軍隊となった。

(5) ミンガラードン士官学校の開設

ビルマ防衛軍の創設と並行して、1943年8月20日ミンガラードンに中堅幹部養成のための士官学校が設置された。²⁹⁷⁾ この学校では士官候補生5期，下士官候補生3期，幼年学校3期，空軍パイロット生1期の教育が実施された。隊長以下教官はすべて日本軍将校および下士官で，生徒は全員ビルマ人であった。教育期間は6か月で，士官候補生のうち成績優秀な者は将校に，他は下士官に任命された。²⁹⁸⁾ 下士官候補第1期生はビルマ防衛軍再編の際選抜された250名，行政府長官推薦の50名，計300名で，1943年9月1日入隊した。³⁰⁰⁾ 開設当初の校長は丸岡大尉，後，福井大佐が着任した。³⁰¹⁾

このミンガラードン士官学校は，ビルマ防衛軍の中堅幹部養成を目的として開設された³⁰²⁾ だけあって，ここから多数の現役佐官クラスの将校が輩出している。現在のビルマ革命評議会，革命政府の要人達およびビルマ国軍の司令官は，ほとんどこの出身者でかためられていると言っても過言ではない。1期から5期までの卒業生の内，現役で活躍している人達をボウ・ミンニョウの著書³⁰³⁾ から抜粋すると次のようになる。(階級はいずれも現職)

294) Bo Than Daing, Vol. 2, p. 277.

295) U Hla, Vol. 2, pp. 178-179.

296) Hpon Kyaw, p. 191.

297) 太田, p. 347.

298) *Ibid.*, p. 347.

299) *Ibid.*, p. 347; U Hla, Vol. 1, p. 56.

300) 太田, p. 347.

301) Bo Min Nyo, p. 8.

302) 『ビルマ攻略作戦』p. 453.

303) Bo Min Nyo, p. 374.

1) 1 期 生

チョーソウ大佐*	革命評議会員。内相。中央治行委議長。
チョーニョン中佐	革命政府運輸省特別官。
チーウィン大佐	1961年第7旅団長。現在退役。
チックカイン中佐	1958年管理内閣の労働省局長。現在退役。
チッマイン大佐	1963年革命評議会員。64年解任。現駐ユーゴ兼駐ブルガリア大使。
ソーミイン大佐*	1962年革命評議会員。64年解任。現革命政府農林省特別官。
ソウフライン中佐	中央軍管区副司令官。
セインミャ大佐*	革命政府内務副大臣。
ティンマウン大佐*	1963年第13旅団長。現在退役。
トゥンイー中佐*	革命政府国防省技術局長。
トゥンアウンヂョー大佐	メイミョウ士官学校長。
タキン・プ*	白旗共産党員。1967年射殺。
ボウ・ポンヂョー	白色 PVO, 1950年帰順。作家。
ミンテイン大佐	ビルマ国軍監察総監。
マウンシュエ大佐	革命評議会員。工業兼労働相。
マウンルイン大佐*	革命政府国家計画省副臣。
ミャタウン中佐*	タイ国駐在武官。
イエーガウン中佐	革命政府農林次官。(万博ビルマ政府代表)
フラティン中佐*	南東軍管区副司令官。
フラモー大佐*	駐インド兼駐ネパール大使。
フラマウン中佐*	革命政府内務次官。
フラシュエー中佐*	基幹軍需物資隊長。
ボウ・テインダン	PVO 赤軍指導者。46年反乱, 帰順後 BSPP 中央本部。
テインハン大佐*	1963年第7旅団長。67年死亡。
エーマウン大佐	1961年第2旅団長。駐在武官。
アウンペー大佐*	革命政府鉱業副大臣。
アウンシュエ準将	駐フランス兼スペイン大使。

第1期生300名の内、成績優秀な者30名³⁰⁴⁾が選抜され、1943年6月5日川島少佐引率の下³⁰⁵⁾,

304) Bo Min Nyo, pp. 37-39; U Hla, Vol. 3, p. 173.

305) 川島威伸氏談話(1970. 8. 29)

日本に派遣された。³⁰⁶⁾ 第2陣の空軍将校10名は1944年3月3日、第3陣の砲兵将校10人は歩兵将校第2陣20名と共に、1944年3月15日日本に向かった。(星印を付けた者がその該当者)

2) 2 期 生

チャーゾー中佐*	「ビルマ式社会主義計画党」中央本部農民部会副書記長。
チャーゾー大佐	革命政府通産次官。
キンゾー大佐	退役。オリエンタル・ホテル支配人。
キンマウンタウン中佐*	第77師団作戦司令官。
チッキン大佐*	ビルマ国軍情報局長。
ソーミャテイン中佐*	革命政府運輸省・内陸水運庁長官。
ソウフライン中佐*	メイティーラ空軍訓練基地司令官。
ソウフライン中佐	「ビルマ式社会主義計画党」本部。
ティンスエー大佐*	南東軍管区司令官。
ティンマウン大佐	第77師団長。
ティンテイン中佐	中央軍管区第1参謀。
ティンウー中佐*	ビルマ国軍情報副局長。
トゥンシェイン中佐	「ビルマ式社会主義計画党」第15管区副議長。
ネードゥン大佐*	駐西独大使館顧問。
バトゥエー中佐*	南東軍管区第1参謀。
マウンニー中佐	歩兵第24大隊長。
マウンタウン中佐*	バトゥー下士官学校長。
ミインスエー中佐	退役。ビルマ製薬事業(BPI)議長。
フラスエー中佐*	革命政府協同組合省局長。
フラポン大佐*	革命政府外務副大臣。
トウテイン中佐*	「ビルマ式社会主義計画党」第1管区副議長。
タウンダン準将*	革命評議会議員。空軍参謀次長。
タンニャン大佐	西北軍管区副司令官。
アウンパー中佐*	退役。タマイン製糸工場長。
ボウ・ニャンマウン*	白色 PVO。帰順。タマダ映画館支配人。
ボウ・アウンナイン*	白色 PVO。

2期生から40名が日本に派遣された。³⁰⁷⁾ 星印のある者がその該当者である。

306) U Hla, Vol. 1, p. 56; Maung Maung (1969), p. 228; 太田, p. 347; 泉谷, p. 216.

307) Bo Min Nyo, pp. 162-163.

3) 3 期 生

3 期生にはビルマ防衛軍の兵士から126名、隊外から30名計156名が選ばれ、1944年5月27日に入隊した。³⁰⁸⁾ この時の校長はゼーヤ中佐、後ヤンナイン少佐に変わった。

キンマウン中佐	第7旅団長。1969年死亡。
セイナルイン大佐	西北軍管区司令官。
ティンウー大佐	革命評議会員。中部軍管区司令官。
ティンアウン中佐	革命政府外務省特別官。
トゥンイー大佐	東部軍管区副司令官。
ミインアウン中佐	人民労働者評議会副書記長。
イエートウン大佐	駐英大使館付武官。
ボウ・タウンキン	革命政府情報省次官補。
アウンブィン中佐	南西軍管区第1参謀。
グンシェイン大佐	1961年旅団長。退役。現革命政府厚生省体育局長。
サンチー大佐	南西軍管区司令官。
ティンニョン中佐	メイミョウ郡部隊長。
チーマウン大佐	参謀本部高級参謀。兼中央治行委副議長。
ティンドゥー中佐	基幹車両保存部隊長。
エーティン中佐	革命政府通産省中央通産評議会。
チーティン大佐	前南西軍管区副司令官。現駐日大使館付武官。
チーハン大佐	前駐日大使館付武官。
トゥンセイン大佐	駐日大使館付武官。1964年死亡。
トゥンティン大佐	国防省教育総監。
バシュエー大佐	駐日大使。(1971年1月転出)
マウンマウンカ大佐	革命政府工業次官。
フラシュエー大佐	
タンセイン大佐	革命評議会員。運輸通信相。
オンペー中佐	革命政府内務省人民警察庁長官。
サンウィン中佐	革命政府通産省通産公社第1号総裁。

4) 4 期および5 期生

4 期生には、年齢20才から25才までの者149名（内 BDA 兵士125名）を選び、1944年9月7日開講した。³⁰⁹⁾ 5 期生としては、179名の入学を認め1945年2月1日に入隊させたが、その年

308) Bo Min Nyo, p. 216.

309) *Ibid.*, pp. 282-284.

の3月27日敗色濃厚な日本軍にビルマ軍が反旗をひるがえしたため、終了には至らなかった。³¹⁰⁾ 4期生、5期生の内著名な者は次のとおり。(4期生は、はじめの2人のみ)

キンオン大佐	第99師団長。
ウー・マウンマウン	最高裁判所長官。
チーミイン中佐	革命評議会議長事務局。
キンマウントゥン中佐	マンダレー県治安行政委員会議長。
チョーカイン大佐	南西軍管区参謀長。
テイングエー大佐	南東軍管区副司令官。

5) 下士官学校および幼年学校

下士官教育は、第1期が1943年11月10日、第2期が1944年3月に開かれ、訓練期間はそれぞれ3か月であった。³¹¹⁾ 幼年学校は1943年1月に発足、出願資格は年齢14才以上16才以下、第7学年終了以上の学力をもつ者と定められた。訓練期間は3年で、第1期の出願者1,800名中100名が合格、内30名に入学が許された。³¹²⁾ 1期生の教育は1944年4月から、2期生は同年11月から、3期生は同年10月からそれぞれ開始されたが³¹³⁾、いずれも終了を待つことなく終戦を迎えた。幼年学校生に対しても本格的な教育が施されたらしく、2期生の一人ウー・ティンソウによると、ラングーン市内からミンガラドンまでの道(約12マイルの距離がある)をよく強行軍させられたという。幼年学校に在籍した人の中で著名な者は、次のとおりである。

ソウミインアウン中佐	第88師団副師団長。
フラトゥン中佐	東部軍管区副司令官。
ウー・チッマウン	革命政府大蔵次官。
セイントゥン中佐	国防省訓練計画副局長。
ウー・ティンソウ(筆名ターカドウ)ビルマ字日刊紙「労働者人民日報」論説委員。	

ミンガラドン士官学校では、将校760名、下士官1,080名、幼年学校生260名の教育を行ない³¹⁴⁾、ビルマ防衛軍の中堅幹部育成の役割を果たしたのである。

(6) 日本による「ビルマ独立」とビルマ国軍

ビルマ全土の平定作戦が終わり日本の軍政が軌道に乗り出した1942年6月4日、バモー博士を中心とする「行政準備委員会」が飯田軍司令官によって組織され³¹⁵⁾、8月1日には「中央行

310) Bo Min Nyo, p. 340.

311) *Ibid.*, p. 170, p.340.

312) *Ibid.*, p.189.

313) *Ibid.*, pp. 340-341.

314) *Ibid.*, p. 341.

315) U Hla, Vol. 1, p. 53; Hla Myo, p. 147; 太田, p. 350; 『ビルマ攻略作戦』p. 521.

政府」が設置された。³¹⁶⁾ 中央行政府はビルマの占領直後「南機関」の手で急造された「ビルマ・バホウ政府」とは異なり、日本軍司令官の意思によって正式に設けられた行政組織である。しかし行政府自体が軍司令官の配下におかれ内政権が許容されるだけの軍政付属機関にすぎなかった。ビルマ人の行政府が成立したとは言っても、日本の軍政は相変わらず存続していたのである。

翌43年5月8日、日本軍当局の命によって25名から成る「ビルマ独立準備委員会」が設置され³¹⁷⁾、8月1日日本の軍政が撤廃されると同時にビルマは主権を有する完全な独立国家となった。³¹⁸⁾ 国家元首（アディパティ）にはバモー博士が就任し、15名から成る新内閣がつくられた。³¹⁹⁾

ビルマ独立当日の様子は、ビルマ政府機関紙「バマーキッ」をはじめ、「トゥーリヤ」「ミャンマ・アリン」などのビルマ語日刊紙8月3日特集号に報道されている。それをまとめたルー・ドゥ・ウーフラ「新聞が報じた戦時下のビルマ」第3巻、イェーボー・フラミョウ「ビルマ連邦歴史関係文書集」、タキン・ルイン「日本軍政時代のビルマ」、および独立式典に直接列席したタキン・ヌ「ビルマ国・5年の歳月」、バモー博士 *Breakthrough in Burma* などの中から関係記事を抜粋整理してみると次のようになる。³²⁰⁾

8月1日午前7時すぎ。行政主席バモー博士以下タキン・ミャ、タキン・タントウン、タキン・トゥンオウ、バンドゥーラ・ウーセインら行政府各長官およびアウンサン將軍などが日本軍司令部に参集。日本軍司令部からは河辺正三中将、中永太郎中将（参謀長）、磯村少将（参謀副長）、片倉、日川、林、平岡の各大佐が出席。

7時半。河辺司令官から軍政廃止の布告が出された。同時に行政府の解散、兵備局、ビルマ国防軍の廃止が通告された。続けて河辺將軍のビルマ独立記念演説が行なわれた。³²¹⁾ こうして第1部が終わった。第2部のビルマ独立式典は政府官邸で行なわれた。

8時25分。ビルマ独立準備委員会議長によって「ビルマ国行政準備組織」の設立が宣せられた。そして「ビルマ国家基本法」が可決され³²²⁾、ビルマ独立宣言書と国家元首選出の布告を出すことが決められた。

316) U Hla, Vol. 1, p. 54 ; Thakin Lwin, p. 139 ; 太田, pp. 350-351 ; 『ビルマ攻略作戦』 pp. 521, 525.

317) U Hla, Vol. 1, p. 55 ; Hla Myo, p. 149 ; Thakin Lwin, pp. 149-150 ; Ba Maw, p. 318 ; 太田, pp. 359-360.

318) U Ba U, p. 266 ; Desai, p. 267 ; Maung Maung (1958), p. 98 ; 太田, p. 443.

319) U Hla, Vol. 1, p. 55 ; Vol 3, p. 65 ; Hla Myo, pp. 149-150.

320) 時間については文献相互間にかなりの食い違いが見られる。ここではビルマ語日刊紙の記事を基にした。

321) 全文のビルマ語訳が、U Hla, Vol. 3, pp. 92-96 に、邦文の一部が太田, pp. 363-365 に掲載されている。

322) ビルマ語の全文が、U Hla, Vol. 3, pp. 107-115 ; Thakin Lwin, pp. 346-355 に、邦訳文は太田, pp. 374-382 および pp. 563-567, 英訳抄文は U Ba U, p. 169 にある。

9時。日本軍司令官および国家元首が登壇、式典副委員長ウー・パインによって「ビルマ独立式典」の開会が宣せられた。続いて「独立宣言書」³²³⁾が、バンドゥーラ・ウーセインによって読み上げられた。そして「国家基本法」³²⁴⁾の採決と国家元首バモー博士の選出とが、同じくウーセインによって発表された。バモー博士は元首としての宣誓を行なった後、ビルマ政府の閣僚16人を任命した。³²⁵⁾

午後2時。ビルマ独立の英文宣言書が宣言省局長ウー・フラペーによって外国に放送された。一方、閣僚会議および枢密院において「日本・ビルマ同盟条約」が審議可決され、ビルマ駐在日本大使沢田廉三、ビルマ国家元首バモー博士の間で調印された。³²⁶⁾

午後1時45分。バンドゥーラ・ウーセインによって米英両国に対するビルマの宣戦布告³²⁷⁾が行なわれた。

ビルマは、たとえ名目的だとは言っても、こうして1943年8月1日“独立”したのである。

独立と同時に、それまでの「ビルマ防衛軍」(BDA)も「ビルマ国民軍」(BNA)と名称を変えた。³²⁸⁾その兵力は今や1万5千になっていた。³²⁹⁾従来、ビルマ方面軍司令官配下の「兵備局」の指揮下におかれていたビルマ軍は、「ビルマ国家基本法」の規定により国家元首の指揮統率に服することになった。国軍に関する「ビルマ国家基本法」の規定³³⁰⁾は、次のとおりである。

第48条 国家元首を以て、ビルマ武装全軍の総司令官とする。

第49条 武装軍の編成、統率、訓練については、直接国家元首に責任をもつ国防大臣をおく。

第50条 国家元首は、国防大臣の推薦によりビルマ武装軍将校の任命権を委譲する。

第51条 軍中央組織本部は、軍事全般について軍司令官に助言を行なう。中央組織本部は、国防大臣、参謀総長、国防副大臣、軍司部長、参謀各部長、軍教育総監および組織本部推薦の軍関係者によって構成される。この中央組織本部においては、総理大臣、首相代理の大臣、大蔵大臣、枢密院議長、同副議長の出席権と発言権を認める。ただし議決権はこれを認めない。

第52条 参謀各部長は、担当武装軍の作戦、計画、実施に責任をもつ。

第53条 国防大臣は、参謀本部およびその配下の軍隊について監察する権限をもつ。

第54条 (1) 国家の安寧維持のため、軍隊は政治のわく外におく。

323) ビルマ語の全文は U Hla, Vol. 3, pp. 78-84; Thakin Lwin, pp. 334-341, に、邦訳文は太田, pp. 365-369 に、英文抄訳は Ba Maw, pp. 327-328 にある。

324) ビルマ語の全文は U Hla, Vol. 3, pp. 107-115 に、邦訳文は太田, pp. 375-382 に、英訳は Mg Mg (1961), pp. 223-228 にある。

325) 閣僚の顔ぶれについては、U Hla, Vol. 3, p. 65; Thakin Lwin, p. 166; Hla Myo, pp. 149-150; Ba Maw, pp. 325-326; 太田, pp. 370-371; 『ビルマ攻略作戦』 pp. 542-543.

326) 条約全文は、ビルマ文が U Hla, Vol. 3, pp. 75-76; Thakin Lwin, pp. 198-199; Hla Myo, p. 146, 邦文は太田, pp. 373-374; 『ビルマ攻略作戦』 pp. 539-540 にそれぞれ掲載されている。

327) ビルマ語の全文は U Hla, Vol. 3, pp. 69-73; Thakin Lwin, pp. 341-345, 邦文は太田, pp. 561-562 にある。

328) Bo Min Gaung, p.188; Mg Mg (1969), p. 213; Han Tin, p. 81; Hpon Kyaw, p. 191; Bo Thein Swe, p. 176.

329) 泉谷, p. 217.

330) U Hla, Vol. 3, pp. 112-113; 太田, pp. 380-381.

(2) 国防大臣の選任は、軍人名簿に記載されている現役高級将校の中から行なう。

第55条 軍事会計は、国家元首直属の特別会計監査機構によって監査される。

ビルマ防衛軍司令官のアウンサン少将が新内閣の国防相、セッチャー大佐が国防副相、レッチャー大佐が国防省組織部長に任命されたため、ビルマ国民軍の新司令官にはネーウィン大佐、参謀長にはゼーヤ大佐、そして士官学校長にはヤンナイン大佐が任命された。³³¹⁾その後東京に設置されたビルマ大使館の駐在武官としてセッチャー大佐が派遣されたため、国防副相にはゼーヤ大佐が昇格した。³³²⁾

(7) 反日抵抗運動

ビルマは1943年8月1日主権を有する独立国家となったが、真の独立を求めるビルマ人にとってそれは、³³³⁾「偽の独立」、³³⁴⁾「メッキの独立」にすぎなかった。ビルマ人は、独立が³³⁵⁾「空虚」であることを知っていた。この当時の日本人に対するビルマ人の態度は、「愛していなくても我慢して接吻する」³³⁶⁾ようなものであった。ビルマ方面軍司令官の後任として木村兵太郎中将が着任した際、外相のタキン・ヌは次のように言っている。

「あなた方は、ビルマに独立を与えたと言う。けれども独立したその日から今日まで、私はあなたが口にしていてる独立が真の独立だとは思っていません。一国の元首暗殺を企てた犯人に、独立したはずの当の政府が指一本触れられないというのが現状なのです。」³³⁷⁾

もっとも例外ではあろうけれども、中には次のような見解もないではない。

「ビルマが英国の支配を脱してはじめて独立したのは、1943年8月1日だと言ってよい。その証拠はたくさんある。(中略) (1) 憲法がビルマ人の手によって起草されていること。独立とは、基本的に次の2点にある。第1は独立した国の憲法がその国自らによって自由に起草されたかどうかであり、第2はその憲法に従って国家が自由に行動できたかどうかである。1943年の独立の際、憲法の起草は終始一貫ビルマ人の手によって行なわれた。そしてその憲法に従って行動する場合、我われは日増しに激しくなる戦時下としては最大の行動権をもち得た。(2) 戦時下の独立であること。1943年の独立は、激戦の最中に得られた史上例のない独立であることを忘れてはならない。戦場で生まれ戦場で育った独立なのである。当時の情勢からみて、ビルマ以上の独立を獲得し得た国はない。まだ戦争が終わっていないにもかかわらず、占領した国土に独立を与えたのは日本だけである。英国は、戦争が終わってから2年も3年もたってからやっと独立を認めている。(3) 大勢に即した独立であること。戦時中、ビルマ人以上に自由を得た民族はいない。(中略) (4) 独立の先駆

331) Bo Min Gaung, p. 188; Han Tin, p. 82; Bo Thein Swe, p. 176; Thakin Lwin, p. 201; U Hla, vol. 3, p. 184; Ba Thaung, p. 271; Ba Maw, p. 326; Mg Mg (1961), p. 59.

332) Bo Thein Swe, p. 176.

333) Bo Thein Swe, p. 176; Htoon Nezin, 1963. 3. 27.

334) Thakin Lwin, p. 257.

335) Mg Mg (1958), p. 99.

336) Thakin Lwin, p. 279.

337) Thakin Nu (1946), pp. 207-8; Thakin Nu (1954), p. 82.

であること。英国によって与えられた今の独立およびその独立の中に含まれている諸々の事柄は、すべて戦時中の独立およびその中身から派生している。そのことは誰も否定できない。いわば、今の独立は戦時中の独立のつけ足しにすぎない。」³³⁸⁾

ビルマ国民軍幹部内の反日的傾向はすでに1942年後半頃から現われていた³³⁹⁾が、独立と共にビルマ国民軍に改編されてからますます活発となった。その指導者には、ボウ・アウンヂー（後準将、退役）、ボウ・ティンペー（後準将）、ボウ・チッキン（現大佐）、ボウ・エーマウン（現駐在武官）、ボウ・イェートゥッ（後白旗 共産党、63年 帰順）などがあり、駐屯先の部隊を操作した。国防相ではボウ・キンマウンガレー（後 AFPFL 閣僚）、ボウ・ウィン（現大佐）、ボウ・マウンマウン（後準将、現大使）などが、共謀活動の本営としてネーウィン大佐の事務室を使用していた。³⁴⁰⁾

1944年日本軍はインパール作戦に失敗し、日本軍勝利の見通しは完全に消え去った。アウンサンらのタキン指導者はこうした情勢を背景に³⁴¹⁾、ひそかに、しかし活発に反日抵抗運動を開始した。1943年末ラングーンで開かれたアジア青少年会議の席上、アウンサンは「独立とは何か？」と題する演説を行ない、暗に反日抵抗運動の必要性をよびかけた。³⁴²⁾そしてそれは、翌44年8月1日の第1回ビルマ独立記念式典での演説へと発展する。アウンサンは「ビルマが独立してちょうど1年たった。この間、われわれは何を得たか。正直に言うと、われわれビルマ人はまだその恩恵を享受していない。われわれの独立は紙の上のものにすぎない。われわれとわれわれの終着点との間には、いまだに長いそして険しい道が横たわっている」³⁴³⁾と述べて対日協力体制からの離脱³⁴⁴⁾を表明した。「日本軍憲兵の行動に誰もが小さくなって怯えているような時に、こうした反日的な言葉をズケズケと述べたアウンサンの演説は聴衆すべてを震えあがらせる」³⁴⁵⁾のに十分であった。

こうした軍の反日抵抗運動とは別に、一部の政治家の間ではもっと早くから抵抗運動が展開されていた。それは主として共産党员によるものであった。³⁴⁶⁾日本軍のビルマ占領がやっと完了したばかりの1942年5、6月頃、タキン・ティンペー、タキン・チョーニェインに会ったタキン・ヌは二人がすでに反日レジスタンス運動に乗り出していることを知った。³⁴⁷⁾二人は、それぞ

338) Dr. Ba Maw. *Amyotha Thadinzin*, Vol. 2, No. 2, 1957. 8. 3.

339) Thakin Nu (1954), p. 42.

340) Mg Mg (1961), p. 63; 太田, p. 443.

341) Donnison, p. 27.

342) Bo Kyaw Zaw, p. 43.

343) Thakin Lwin, p. 258; Mg Mg (1958), p. 101; Cady, p. 480.

344) アウンサン自身「私は日本が与えた独立は名目にすぎない、とそれとなく言ったことがある。それで兵士達も日本に抵抗する時が来たと言いつくようになった。」と述べている。Bo Htun Hla, *Myamma Alin*, 1963. 3. 27.

345) 大野徹「アウンサン将軍(Ⅱ)」p. 51; Bo Htun Hla, p. 50.

346) Ba Maw, pp. 386-387.

347) Thakin Nu (1954), p. 21; Butwell, p. 36; Mg Soe Mg, p. 56.

れビルマ共産党と人民革命党の黨員であった。テインペーは同年、陸路インドに赴いて³⁴⁸⁾、ビルマの反日レジスタンス組織と連合軍との連絡をとった。³⁴⁹⁾ 共産党のタキン・ソウは、日本の軍政開始とともにピャーポン県内に隠れ、地下組織を通じて反日抵抗運動をくりひろげていた。³⁵⁰⁾ タキン・チョーセイ、ウー・コウコウヂー、ラーヂャン（後白旗共産党管区委員）らを中心とする別の共産党グループも、宣伝文書を作成配布して反日運動を開始した。³⁵¹⁾ タキン・ミャ、タキン・チッ（後白旗共産党政治局員）、コウ・バスエーらが率いる人民革命党（後の社会党）も、共産党とは別個にレジスタンス運動を展開した。³⁵²⁾

だがこの頃の抵抗運動は、まだ強力な日本の軍政下ではほとんど効力をもたなかった。それにこの頃はまだ、幅広い統一戦線はできていなかった。組織相互間の交流もなかった。各組織、各政党は、勝手に単独行動をしているだけであった。³⁵³⁾

軍の反日運動は、44年8月頃から急速に進展し始める。その具体的な準備は、チョーゾー少佐を隊長とする「模範大隊」がペゲーに設置された44年2月16日から始まる。模範大隊は、本来、ビルマ国軍の将校に高等軍事教育を施すのが目的であったから、受講生も当然第1, 第2, 第3各大隊の将校だけに限られていた。³⁵⁴⁾ それが、現実には反日抵抗の準備教育に利用されたのである。

軍内部における反日準備の指導者は、二派に分かれていた。一派は、ウー・バスエー、ウー・チョーニェインら人民革命党と接触のある将校で、ボウ・マウンマウン（後準将）、ボウ・アウンヂー（後準将）、ボウ・キンマウンガレー（後閣僚）、ボウ・ウィン（現大佐）らがそうであった。彼らは「人民革命組織」と自称していた。もう一派は、共産党のタキン・ソウ、タキン・ティンミャらと接触していた将校で、その中にはボウ・リンヨン（志士30人の一人）、ボウ・ターヤー（志士30人の一人）、ボウ・テインダン（後人民義勇軍赤軍派指導者）らがいた。³⁵⁵⁾

1944年8月4日から4日間、このペゲーの模範大隊の隊長官舎でアウンサン將軍は、タキン・ソウ、タキン・タントウン、タキン・バヘインら共産党の代表と密かに会って、反日運動について話し合った。³⁵⁶⁾ 「反ファシスト組織」(AFO) は、こうして誕生した。反日抵抗を軸とする軍と各政党との会談は、この日を皮切りに回が重ねられた。8月23日ラングーン市パーク通

348) この時の模様は、Thein Hpe Myint (1968) に詳しく述べられている。

349) Maurice Collis, p. 194; Tinker, p. 13; Desai, p. 113; Butwell, p. 43; Donnison, p. 126.

350) Thakin Nu (1946), p. 104; Mg Mg (1961), p. 61; Thakin Lwin, p. 280.

351) この組織は1944年約300人が憲兵隊に逮捕され、逆用されている。Thakin Lwin, p. 280.

352) Thakin Lwin, pp. 280-1.

353) 1945年8月19日のネートウーイエイン大会におけるアウンサン演説。演説の全文は Thakin Lwin, pp. 299-301; U Hla, vol. 4, pp. 243-250; Thakin Tin Mya, pp. 323-328 にある。

354) Thakin Tin Mya, vol. 5, p. 19; Bo Than Daing, p. 280.

355) Thakin Tin Mya, vol. 5 (1968), p. 10-24.

356) Bo Kyaw Zaw, p. 29; Thakin Tin Mya, pp. 100-103; Bo Htun Hla, *Myamma Alin*, 1963. 3. 27.

りにある国防大臣アウンサンの家で「反ファシスト組織」の会合がもたれた。³⁵⁷⁾ 従来、ビルマ軍、ビルマ共産党、人民革命党などによって個別的に進められてきた反日抵抗運動は、ここでようやく一本化し以後着実に進展して行く。この頃からインドにいるタキン・ティンペーと連絡がつくようになった。³⁵⁸⁾ 9月に入ってから、アウンサン、ネーウィン、イェートゥッらの首脳部とウー・バスエー、ウー・チョーニェインらの人民革命党の指導者とが、デーダイエーにあるタキン・ソウの家に集まって協議した。³⁵⁹⁾ このデーダイエー会談の直後、ラングーンのタキン・ヌの家でまた会合が開かれた。³⁶⁰⁾ 集まったのは、アウンサン、タキン・ミヤ、タキン・タントゥン、タキン・チッラであった。この時アウンサンは、「起て。ファシスト強盗をうて」と題する長い声明を読み上げ、全員の賛同を得た。³⁶¹⁾ 10月3日には、ボウ・アウンヂー、ボウ・マウンマウンらの人民革命党系将校とタキン・チッ、ヤンゴン・バスエー（後、作家）ら人民革命党の代表が、タキン・ソウの家に集まって協議した。³⁶²⁾ そして翌45年3月1日から3日間、アウンサン将軍宅で再度会合がもたれ、ここではじめて反日抵抗運動の具体的活動が決められた。³⁶³⁾ この時の出席者は次のとおり。

ビルマ軍—アウンサン将軍、ネーウィン大佐、レッヤー大佐、ゼーヤ大佐、ソーチャードウ大佐、チョーゾー少佐、バトゥー少佐、マウンマウン少佐、イェートゥッ少佐、ポウクン少佐、アウンヂー少佐、セインフマン少佐、ヤンアウン少佐、キンマウンガレー少佐。
共産党—タキン・ソウ、タキン・タントゥン、タキン・ティンミヤ。
人民革命党—ウー・バスエー、ウー・チョーニェイン、タキン・チッ、ウー・フラマウン。

この時の会合で AFO の指令第 1 号が出され³⁶⁴⁾、対日反乱開始の日時と各部隊の受持区域とが決定された。³⁶⁵⁾ ビルマ軍の兵力は、45年1月頃、歩兵7個大隊³⁶⁶⁾、訓練1個大隊、工兵2個大隊、重軽砲部隊、輸送部隊等を含めて約1万5千であった。³⁶⁷⁾ 日本の第15軍司令部は、ビル

357) Thakin Lwin, p. 282; Sein Tin, p. 189; Thakin Tin Mya, p. 17.

358) Thakin Tin Mya, vol. 5, pp.151-160.

359) Thakin Tin Mya, p. 25; Mg Mg (1961), p. 63.

360) Butwell および Collis は、この時の会合を44年8月1日とし、これをもって AFO（または AFPFL もしくは PBF）の正式発足としている。けれども AFO の正確な発足年月日を明らかにした資料は今のところない。ネートラーイェイン大会でのアウンサン演説によると「1944年8月はじめに結成された」とあるが、場所は明示していない。またはじめは AFO だったのか、はじめから AFPFL だったかについて、アウンサンは45年5月14日の記者会見で次のように述べている。「組織のビルマ名を英訳すると AFPFL となる。インドにいる同志ティンペーは PBF とよび、英軍は AFO、米軍は AFL とよんでいるが、みな同じだ。」U Hla, vol. 4, p. 189.

361) Thakin Nu (1954), p. 105; 全文が Hla Myo, pp. 176-9; Thakin Tin Mya, pp. 104-6 に掲載されている。

362) Thakin Tin Mya, p. 25; Thakin Tin Mya, vol. 5, p.163.

363) Thakin Tin Mya, pp. 55-56; Thakin Tin Mya. *Myawaddy*, 1968 Oct., pp. 182-183.

364) Hla Myo, pp. 181-183 に全文が掲載されている。

365) Sein Tin, p. 193.

366) この BNA 7 個大隊の戦闘能力を連合軍はあまり高く評価していなかった。*Reconquest of Burma*, vol. 2, p. 121.

367) Thakin Lwin, p. 288; Hpon Kyaw, p. 98; Bo Htun Hla. *Myawaddy*, 1967 Nov., p. 106.

マ軍部隊をテナセリム地方に配置する計画を立てたが、アウンサン以下ビルマ人各部隊長の強硬な反対によって、結局ピインマナー、アーラン、デルタ地帯、ペグー地方に各2個大隊を駐屯させることになった。³⁶⁸⁾つまり反日抵抗戦において重要な戦力となる歩兵大隊は、以上の8個大隊だけだった³⁶⁹⁾のである。この時の軍歩兵部隊の編成と配置状況は、次のとおり。

部隊名	指揮官	駐屯地
第1大隊	ボウ・ティンペー（後準将）	トゥンテー
第2大隊	ボウ・サンユ（現準将）	ピャロー
第3大隊	ボウ・フラペー（後人民義勇軍）	ペグー
第4大隊	ボウ・ティンマウン（後大佐）	ミンガラードン
第5大隊	ボウ・タウンチー（現大佐）	メイティーラ
第6大隊	ボウ・セインウィン（現準将）	アウンラン
第7大隊	ボウ・マウンガレー（後死亡）	ミンガラードン
模範大隊	ボウ・チョーゾー（後準将）	ペグー

以上8個大隊のほか、カレン族1個大隊（ボウ・トゥンセイン）がラングーンに、第1工兵大隊（ボウ・エーマウン）はマンダレーに、第2工兵大隊（ボウ・モウニョウ）はアウンランに駐屯していた。またボウ・ミインアウンの指揮する機関砲大隊はサガイン、マンダレー、メイミョウ、シッタウンに分散しており、ボウ・キンニョウ配下の大砲部隊はラングーンにいた。ミンガラードン士官学校（校長ボウ・ヤンナイン）には第5期生が在学中であった。³⁷⁰⁾

1945年3月のAFO会議で決定された反乱区域と担当指揮官および政治顧問は、次のとおりである。³⁷¹⁾

管区名	該当地区
第1管区	プローム、ターヤーワディー、インセイン、ヒンダータ（東部）
第2管区	ハンターワディ、ピャーボン、マウービン
第3管区	バテイン、ミャウンミャ、ヒンダータ（西部）
第4管区	ペグー、シュエヂン、タトン
第5管区	モールメン、タボイ、メルギー
第6管区	メイティーラー、ピインマナー、タウンゲー、南シャン州
第7管区	タイェッ、アーラン、マグエー、ミンブー

368) Hpon Kyaw, p. 98.

369) Mg Mg (1969), p. 229.

370) *Ibid.*, pp. 227-228.

371) Bo Thein Swe, pp. 183-184; Thakin Lwin, p. 289; Hpon Kyaw, pp. 142-144; Sein Tin, pp. 193-194; Ba Thaung, pp. 282-283; U Hla, vol. 4, p. 186; Thakin Tin Mya, p. 62; Thakin Tin Mya, *Myawaddy*, 1968 Nov., pp. 180-181; *Loktha Pyithu Nezin*, 1968. 3. 27.

後、以上の7管区にアラカン、上ビルマ、ラングーンの3管区が加えられて³⁷²⁾、計10管区になった。

管区名	司令官	政治顧問
第1管区	アウンサン将軍（後マウンマウン少佐）	タキン・バヘイン（共産党，後死亡）
第2管区	ネーウィン大佐（後アウンヂー少佐）	タキン・ソウ（後，赤旗共産党）
第3管区	ソー・チャードウ大佐	
第4管区	チャーゾー少佐	タキン・チッ（後，白旗共産党）
第5管区	ティントゥン大尉	タキン・バティンティン （後，白旗共産党）
第6管区	イエートゥッ少佐	タキン・ティントゥン （後，白旗共産党）
第7管区	アウン少佐	タキン・ティンミャ （後，赤旗共産党）
ラングーン	キンニョウ少佐	ウー・バスエー（後，社会党） ウー・チャーニェイン（RET）

1945年の反乱開始当時，ビルマ軍の構成は次のようになっていた。³⁷³⁾

司令部	司令官	アウンサン将軍（志士30人の一人，1947年暗殺）
	副司令官	レッヤー大佐（志士30人の一人，現在タイ国亡命中）
	参謀長	ゼーヤ大佐（志士30人の一人，後白旗共産党，射殺）
	高級参謀	ヤンアウン大佐（志士30人の一人，後白旗共産党，肅清）
	連絡参謀	フラアウン中佐（現大佐）
	情報参謀	ウィン中佐（現大佐，駐米大使館顧問）
	軍務局長	ゾーミン少佐（後マウンマウンチャーウィンと改名，現準将）
第1管区	教育總監	ポーケン少佐（後白色人民義勇軍，駐ソ大使，死亡）
	指揮官	マウンマウン少佐 ³⁷⁴⁾ 以下 1,452名
	第101大隊	オンチャー大尉（士官学校5期生）
	第102大隊	チャーミン少佐
	第104大隊	ティンマウン少佐（現大佐）
	第106大隊	ミンガウン少佐（志士30人の一人）

372) Thakin Tin Mya, p. 61.

373) *Ibid.*, p. 112, 147, 177-180, 197-198, 215, 234-237, 247-248, 271-272, 303-309; Bo Thein Swe, pp. 192-194; Khin Soe Win, *Thwethauk*, 1970 Mar., p. 13-16.

374) 第1管区の実際の指揮官はマウンマウン少佐ではなく，ルンティン少佐だったという異説もある。
Myamma Alin, 1961. 3. 27.

第2管区	指揮官	アウンヂー少佐 以下 697名
	第80大隊	アウンヂー少佐（後準将，退役）
	第83大隊	チーウィン大尉（後大佐，退役）
	第86大隊	ティンペー少佐（後準将）
第3管区	指揮官	ソー・チャードゥ大佐（現在タイ国亡命中） 以下 155名
第4管区	指揮官	チャーゾー少佐 以下 2,267名
	第102大隊	エーマウン少佐（現大使）
	第103大隊	バティツ少佐（現通産公社第4号）
	第104大隊	ミョウミイン少佐
	第105大隊	ルンティン少佐（後大佐，退役）
	第106大隊	セインウィン少佐（現準将）
第5管区	指揮官	ティントウン少佐 以下 421名
	モールメン大隊	ラヤウン少佐（志士30人の一人）
	タトン大隊	フムンタイ少尉
	タボイ大隊	ティントウン少佐（現人民岩石事業生産部長）
第6管区	指揮官	イエートウッ少佐 以下 1,943名
	第1大隊	タウンチー少佐（現大佐）
	第2大隊	ウェーリン大尉
	第3大隊	ニユン少佐
	第4大隊	バラ少佐（志士30人の一人）
	第5大隊	ティーハ少佐（後バタウンと改名，大佐）
第7管区	指揮官	アウン少佐 以下 2,056名
	工兵第2大隊	モウニョウ少佐（志士30人の一人）
	第2大隊	サンユ大尉（現準将）
	第103大隊	ボンミイン大尉（志士30人の一人）
	第105大隊	アウンミン少佐（現通産公社第19号特別官）
	第107大隊	チッサイン大尉（現大使）
	第108大隊	ミインアウン少佐（志士30人の一人）
上ビルマ管区	指揮官	バトゥー少佐（後アーラーワカ大尉） 以下 301名

1945年3月17日午前10時，ラングーンのシュエダゴン・パゴダ西側の広場³⁷⁵⁾で，ビルマ国軍の出陣式が行なわれた。³⁷⁶⁾この時集結した部隊は次のとおり。³⁷⁷⁾

375) ウーウイザヤ通りとバウンデリー通りの交差点の所にある。現在「革命公園」と呼ばれている。

376) Sein Tin, p. 194; Hpon Kyaw, p. 192; Ba Thaung, p. 288; 太田, p. 447.

377) Hla Myo, p. 165; Ba Thaung, p. 290.

部 隊 名	指 揮 官
国 防 省	マウンマウン少佐（後準将，大使）
第 1 大 隊	ティンペー少佐（現準将）
第 4 大 隊	テインマウン少佐
第 7 大 隊	マウンガレー中尉
カレン第1，第2大隊	トゥンセイン少佐，ティー・ポウチョー大尉
訓 練 部 隊	テインダン大尉（後人民義勇軍赤軍派）
徴 兵 部 隊	ルンティン少佐（後大佐，退役）
軍 備 部 隊	キンマウンガレー大尉（後閣僚）
野戦病院隊	マウンマウンヂー少佐（後大佐，退役）
通 信 部 隊	シェイン少佐（後大佐，死亡）
補 給 部 隊	ウィン少佐（現大佐）
工 兵 部 隊	エーマウン大尉（後大佐，駐在武官）
大・砲 部 隊	キンニョウ少佐（後大佐，退役）
参 謀 本 部	アウンシュエ少佐（後準将，大使）

式場には，バモー首相，アウンサン陸相以下ビルマ政府の要人およびネーウィン，レッヤー，ヤンナイン，ゼーヤ，マウンマウン，アウンヂーといったビルマ軍の佐官級将校ならびにビルマ国軍軍事顧問部最高顧問の桜井徳太郎少将などが並んだ。しかし日本軍からは，木村司令官も田中参謀長さえも出席しなかった。ビルマ方面軍参謀副長の一田少将が，木村司令官の式辞を代読したにすぎなかった。³⁷⁸⁾その後，アウンサン将軍が登場して次のような演説を行なった。

「兵士諸君！くどくは言うまい。今から戦場へ出陣する。苦しいだろう。飢えるかもしれない。様々な困難に直面するだろう。だが，ビルマ人としてビルマ人の意気を示せ。上官の命令に従え。上官は兵士と一心になれ。諸君に約束していたとおり，自分も兵士諸君と共に戦う。ビルマの敵を粉碎せよ。身近かな“敵”を探して攻撃せよ。以上」³⁷⁹⁾

アウンサン将軍は，“敵”というのが 英国軍なのか 日本軍なのかはっきり言わなかった。³⁸⁰⁾「当時，ビルマ人と日本人とは，“敵”という言葉について勝手に解釈していた。ビルマ軍にとって“敵”とは何を指しているのかよく判っていた。日本人は，敵と言えは英軍のことだとばかり思い込んでいた」³⁸¹⁾のである。こうしてラングーンを後にした彼らは，二度と日本軍の下へは帰って来なかった。³⁸²⁾

378) 『秘録大東亜戦史』，p. 319.

379) Bo Min Nyo, pp. 327-328; Thakin Lwin, p. 287; Hla Myo, p.166; Ba Thaung, p. 285-286.

380) Bo Htun Hla, p. 54; 大野徹「アウンサン将軍(Ⅱ)」p. 53.

381) *Hanthawaddy*, 1966. 3. 27.

382) 『秘録大東亜戦史』，p. 354.

反乱開始の日は、はじめ1944年8月25日と決められたが、後1945年4月2日、そして最後には45年3月27日にと変更された。³⁸³⁾ところが、命令を待ちきれず実力行使にのりだすところが現われた。アラカン、メイティーラー、マンダレー駐屯の部隊と AFO ゲリラ隊である。アラカン地方では、ウー・ピンニャーティーハ（後 AFPFL アラカン管区議長）³⁸⁴⁾、その兄ウー・セインダー（独立直前の1947年5月、アラカン分離を主張して蜂起した）³⁸⁵⁾、亡命先のインドから密かに戻って来たコウ・ニョウトゥン（1948年情報相）³⁸⁶⁾らの「アラカン愛国ゲリラ組織」が、44年12月上旬から反乱を始めた。³⁸⁷⁾ 続いて45年2月28日、連合軍のメイティーラー攻撃が始まると同時にタウンチー少佐の率いる歩兵第5大隊が、兵営から姿を消した。³⁸⁸⁾ そして血気にはやった上ビルマ管区司令官バトゥー少佐（後病死）は、3月8日独断で日本軍への攻撃命令を発した。³⁸⁹⁾ それは次のようになっている。³⁹⁰⁾

「兵士諸君。国家の独立のため、われわれは生命をかえりみず軍人らしく行動してきた。それは、諸君が一番よく知っている。ファシスト日本は、わが民族に様々な弾圧を加え我々に独立を許容しなかったばかりでなく、奴隷状態におとしこんだ。バモーとアウンサンに率いられる傀儡ビルマ政府およびその軍隊は、いつかは日本の弾圧をはねのけ国を守ってくれるものと、われわれは信じて来た。だが彼らは、今に至るも何一つしてくれていない。われわれは、もはや忍耐できない。サガイ、マンダレー、ティーボーに駐屯する 予の配下の 諸部隊は、反ファシスト人民組織に協力し1945年3月8日を以てファシスト日本に宣戦布告する。兵士諸君。ファシスト日本を見つけ次第一掃せよ。」

アウンサン將軍は直ちにバトゥー少佐指揮下の諸部隊を「反乱軍」と認定したが、それは日本軍を欺くための苦肉の策であった。³⁹¹⁾

1945年3月27日、アウンサン指揮下のビルマ国軍約1万5千名は、「人民独立軍」と改名して、³⁹²⁾ 全土でいっせいに反旗をひるがえした。³⁹³⁾ 3月25日に出されたアウンサンの戦闘命令は次のとおりである。³⁹⁴⁾

「上ビルマ管区司令官バトゥー少佐は、配下の兵を指揮して日本軍を攻撃せよ。ヤンアウン少佐は前線指揮官として、ゼーヤ大佐は司令部指揮官として参謀本部を率い、タイェッ基地からミンドンに出撃せよ。マウンマウン少佐の率いる第1管区軍は、ターヤワディー、パウンダーに向かえ。」

383) Hpon Kyaw, p. 141; Hla Myo, p. 164; Ba Thaung, p. 281; Thakin Tin Mya, *Myawaddy*, 1969 Jan., p. 172.

384) *Yangon Thadinza*, 1958. 1. 7.

385) Cady, p. 543, 558; 1958年1月ミンビャーで投降。 *Yangon*, 1958. 1. 29.

386) Sein Tin, p. 115; Ba Maw, p. 205.

387) Thakin Lwin, p. 283; Thakin Tin Mya, p. 280; Hpon Kyaw, p. 142.

388) Hpon Kyaw, p. 142; Thakin Lwin, p. 283; Han Tin, p. 84.

389) Hpon Kyaw, p. 142; Han Tin, p. 84.

390) Hla Myo, p. 164.

391) Hla Myo, p. 164.

392) Hpon Kyaw, p. 193; Hla Myo, p. 167.

393) Han Tin, p. 84; Mg Mg (1961), p. 65; Trager, pp. 62-63; 太田, p. 447.

394) Thakin Lwin, p. 290; Thakin Tin Mya, *Myawaddy*, 1968 Dec., pp. 182-183.

ネーウィン大佐は第2管区軍を率いてパーボンからデルタに、ソーチャードウ大佐は第3管区軍を率いてマウービンからデルタに、それぞれ出撃せよ。レッヤー大佐は第2、第3管区軍の連絡に当たれ。チャーゾー少佐は第4管区軍を率いてペグーで日本軍を迎撃せよ。ティントゥン大尉は第5管区軍を指揮してテナセリムに向かえ。イエートゥッ少佐は第6管区軍を率いて鉄道沿いにメイティーラー、ピインマナーに向かえ。アウン少佐は第7管区軍を指揮してタイェッからミンブーに進撃せよ。
司令官 アウンサン」

アウンサン將軍名の対日抵抗戦闘開始の告示は、3月27日の夜に出された。それは次のようになっている。³⁹⁵⁾

「国民の皆さん。ビルマ軍、ビルマ共産党、人民革命党が率いる人民解放連盟は、ファシスト日本政府に宣戦布告した。

- 1) ビルマ軍は目下、イラワジ川西岸ではミンブー県からヒンダータ県まで、東岸ではアーラン地方からラングーンまで、デルタ地帯全域、およびペグーからピインマナー、シャン州にかけて、またテナセリム地方でも一斉に戦闘を開始している。
 - 2) ミンブー県、タイェッ県、プローム県の一部は、すでにビルマ軍によって占領された。
 - 3) アラカン地方では、ニョウトゥンを中心とするレジスタンス組織が連合軍に協力して日本軍を追いつめた。マンダレー地方でも、ビルマ軍およびレジスタンス組織が日本軍と戦っている。
- 国民の皆さん。

- 1) 我々に敵の情報を与え、食糧、薬品、車両の補給を乞う。
- 2) 武器を集めて人民解放組織を結成せよ。
- 3) 官吏、医者、技師、看護婦は、わが軍に参加せよ。
- 4) 武器を所有している者は、わが軍または人民解放組織に提供せよ。非協力者は処罰する。
- 5) 全国民、次の事柄を実行せよ。日本人に雇われている労働者は武器を奪取して逃亡せよ。日本人に没収された資材は奪い返せ。取得した資材は隠匿せよ。日本軍の往来する道路、橋を遮断もしくは破壊せよ。通信線は切断せよ。日本軍の武器庫、貯油庫、飛行場を襲撃せよ。日本人は見つけ次第捕えよ。抵抗する場合には殺してもよい。逃亡日本兵およびインド国民兵を捕えた場合はわが軍に引き渡せ。道路沿いにある町や村の住民は全員避難せよ。(以下略)」

日本軍憲兵隊は、1943年頃からしばしば反乱の徴候を察知、軍司令部に具体的に報告していた。³⁹⁶⁾ またビルマ政府の諜報機関も、1944年の中頃には反乱計画に関する情報を入手していた。内務大臣ウー・バウインおよび特高長官ウー・オンチョーが入手した対日レジスタンス指導者一覧表が、バモー首相の裁諾を得た後密かに焼却されたという事実が、当時情報大臣をしていたバンドゥーラ・ウーセイインによって明らかにされている。³⁹⁷⁾ それによると、焼却前一覧表を見せられた農林大臣のタキン・タントゥンは一瞬顔色を変えたという。また、タウチャンにいたヤンナイン少佐は、反乱開始前日の45年3月26日、ビルマ国軍が対日反乱のため出動したという情報をバモー首相に伝えている。³⁹⁸⁾

395) Hla Myo, pp. 167-170; Thakin Lwin, pp. 290-293.

396) 『秘録大東亜戦史』, p. 319; 太田, pp. 447-448.

397) Bandoola U Sein. *Myamma Alin*, 1967. 3. 27.

398) Thakin Tin Mya. *Myawaddy*, 1963 Mar., p. 170.

45年3月22日、アウンサン將軍はビルマ国軍軍事顧問部の桜井少将に何の連絡もせず、アウンランに出かけてしまった。行方不明になったアウンサンを探しに出た桜井少将は、途中ミンガラドン士官学校に立ち寄った。士官学校からは、教官も生徒も一斉に姿を消していた。一方、ペグーのビルマ軍部隊が4月12日アウンランに向かうとの情報を得て調べに行ったビルマ国軍軍事顧問部の鈴木大和少佐は、チョーゾー少佐に営内を案内され反乱の徴候なしと判断して戻って来た。念のため夕方もう一度兵営を探らせたところ、その時はもうもぬけの殻になっていた。³⁹⁹⁾

ビルマ字日刊紙「ミャンマ・アリン」の1959年3月27日特集号に掲載されたボウ・トゥンフラの解説「史上に燦たる反日抵抗」の中に、日本の憲兵隊から出された反乱軍指導者の手配状の写真⁴⁰⁰⁾がある。その手配状は、アウンサン、ネーウィン、チョーゾーの3名に関するもので、次のようになっている。

- (1) タキン・オンサン。別名ボ・テーザー。国防大臣。軍司令官。少将
 - 1) 反乱ノ首謀者。
 - 2) 3月16日「プロム」ノ県庁ヲ訪問セシ事実アリ。
 - 3) 其ノ後郷里「エナンジョン」県「トンドンダー」郡「ナモツ」村ニ赴キタル事実アリ。
 - 4) 3月27日「タエトミョー」発、「ミンドン」ニ向ヒタルトノ情報アリ。
 - 5) 一時前線ニ赴クモ「デルタ」ニ向フトノ情報アリ。
 - 6) 「デルタ」ノ「ワケマ」附近ニ潜伏シタリトノ情報アリ。
 - 7) 家族ハ、3月19日蘭貢「バガラ」埠頭ヨリ民船ニテ「ピアボン」ニ赴クト称シ出発セシ事実アリ。
 - 8) 家族ハ現（不明）県知事保護セリ。又、「ミャンミヤ」市（妻ノ出生地）ヘ移動セントス。
- (2) ボ・ネウイン。別名タキン・シュモン。兵站局長。大佐。
 - 1) 家族ヲ「タラワジ」カラ「プロム」ヘ移送セシメタリトノ情報アリ。
 - 2) 3月22日夜ビルマ人4,5人ヲ伴ヒ「モービン」ヘ行クト称シ、蘭貢「バガラ」埠頭ヨリ「モーターボート」ニテ出発セリト。
 - 3) 4月初メ蘭貢市内ニ潜入、インド軍ト連絡セリ。
 - 4) 妻ハ蘭貢市内ニ居住シアリ。
- (3) ボ・チョウゾウ。別名タキン・シュエ。蘭貢ペグー教導隊長。少佐。
 - 1) ボ・バラ少佐ト共ニ「ペグー」県「ミン」村附近ニ潜伏中。反乱軍ヲ「マルタバン」戦線ニ配置シ日本軍ノ後方遮断ヲ企図シアリ。
 - 2) 4月3日、ボ・チョウゾーハ「ペグー」県「ミチョウ」村ニテ村民ニ対シ反乱軍ヘノ協力演説ヲナセリ。

この反乱（ビルマ人は「抵抗」とよんでいる）には加わらなかった者も少なくない。幼年学校2期生のウー・ティンソウ（筆名ターガドウ）は、次のように述べている。

399) ビルマ国軍軍事顧問部、鈴木大和元少佐の記録。A *Memo of Burma Army Rebellion*, 1956 のビルマ語訳。Hpon Kyaw, pp. 103-105.

400) 1968年10月4日マンダレーのルードゥ・ウーフラ宅を訪れた筆者は、頼まれてその手配状をビルマ語に訳したことがある。それは後に U Hla, vol. 4, pp. 104-108 に解説とともに転載された。

「こうしたことを書けば、関係者の中には私を殺してやりたいと思う者もいるかも知れない。だが、迫害したければしなさい。貶したければ貶しなさい。(中略) 反日抵抗の際、私が知っている限りでも、義父に伴われて陣地に行った‘抵抗の志士’、扉を閉めて邸宅の中に引きこもった‘抵抗の志士’、金銀財宝を後生大事にかかえて逃げ回った‘抵抗の志士’は、無数にいる。」⁴⁰¹⁾

ビルマ国軍の蜂起は、4月2日になってはじめて海外に伝えられた。それはネーウィン大佐、アウンゲー少佐指揮下の第2管区軍の無線局から発信された。⁴⁰²⁾ 内容は激しい調子で日本を非難したものである。内容の一部を抜粋する。

「ビルマ軍は、ビルマ全国民と共に、本日、1945年4月2日0時10分を以て、ファシスト日本に宣戦布告しました。(3回くり返す) ただ今、ビルマ軍がファシスト日本に宣戦布告したことを全世界に知らせるため、6,200キロサイクル、48～39メートル、モールス信号で送信しています。これから24時間、15分おきに1回ずつ英語とビルマ語の2言語で放送を続けます。(以下略)」

3月9日マンドレー市内に英印軍が突入、マンドレー・ヒルにこもって頑強に抵抗する日本軍を攻撃した。⁴⁰³⁾ マンドレーは12日陥落した。⁴⁰⁴⁾ バモー博士以下タキン・ヌ、タキン・ミヤ、バンドゥーラ・ウーセインなどビルマ政府の首脳とボウ・ヤンナイン、ボウ・ラヤウンなどビルマ国軍指揮官の一部は、4月23日、日本軍司令部の木村兵太郎中将、参謀長田中新一中將らと共に、モールメンに退却して行った。⁴⁰⁵⁾ ラングーンは、5月1日セインティン大尉、キンニョウ大尉、ルンティン大尉らの率いるビルマ軍部隊によって占領された。⁴⁰⁶⁾ それは、連合軍がラングーンに到着する2日前であった。⁴⁰⁷⁾ 8月15日日本はポツダム宣言を受諾して、無条件降伏をした。ビルマ戦線における降伏文書調印式は、南方軍参謀長沼本中将と東南アジア方面軍参謀長ブラウニング中将の間で8月27日行なわれ⁴⁰⁸⁾、9月13日にはビルマ方面軍参謀副長一田少将と第12軍参謀長アームストロング準将との間に、戦闘停止、武装解除に関する細目の取りきめが結ばれ⁴⁰⁹⁾、ビルマにおける戦闘状態に終止符を打った。

IV 独立後のビルマ連邦軍

(1) 過渡期のビルマ軍

1945年5月3日、英軍がラングーンに入城した。それから10月15日まで、ビルマにはランス

401) Thagadoe, *Myamma Alin*, 1961. 3. 27.

402) Han Tin, p. 85; Thakin Lwin, p. 294; Hla Myo, pp. 170-171.

403) Matthews, p. 77; Bisheshwar Prasad, *Reconquest of Burma*, vol. 2, p. 353.

404) U Hla, vol. 4, p. 144.

405) Thakin Nu (1946) p. 283; Ba Maw, pp. 395-396; Bo Thein Swe, p. 190; Butwell, p. 45; 『秘録大東亜戦史』, p. 321, 349.

406) Thakin Tin Mya, p. 316; Mg Mg (1961), p. 67.

407) U Hla, vol. 4, p. 178, 226; Bo Thein Swe, p. 191; Han Tin, p. 85; Matthews, p. 85; Desai, p. 270.

408) U Hla, vol. 4, pp. 292-293.

409) U Hla, *Postwar Burma*, p. 55.

少将による軍政が施かれた。⁴¹⁰⁾そして10月16日、レジノールド・ドーマン・スミス総督が亡命ビルマ政府の閣僚サー・ポートゥン、サー・トゥンアウンジョーらを伴って帰任⁴¹¹⁾、民政が復活した。⁴¹²⁾10月17日、総督は補佐機関である行政参事会（15人以内）と立法評議会（50人）の設置に関する布告を出した。⁴¹³⁾最初総督は、行政参事会員にはシムラに亡命していたビルマ政治家2名とイギリス人官僚2名をあて、残りは AFPFL に渡す意向であった。⁴¹⁴⁾これに対し AFPFL は、AFPFL を全国民の統一組織と認定すること、選挙を即時実施すること、インドと同等の待遇を与えること⁴¹⁵⁾、行政参事会員15名の内11名は AFPFL に渡すこと⁴¹⁶⁾、その人選は AFPFL に一任すること、内務長官のポストは AFPFL 代表に渡すことなどの条件をつけた。⁴¹⁷⁾だがこの要求は容れられず⁴¹⁸⁾、AFPFL は総督への協力を拒否する。⁴¹⁹⁾総督は止むを得ず、11月1日サー・ポートゥン、サー・トゥンアウンジョー、ウー・プなど AFPFL 以外の人物で行政参事会を組織した。⁴²⁰⁾立法評議会員34人も、12月1日には任命された。⁴²¹⁾独立を要求する AFPFL の政治活動が活発化し、デモやストが続発、国内の秩序が乱れ始めた。そして46年6月14日、スミス総督はビルマを去った。⁴²²⁾後任総督はヒューバート・ランスであった。新総督は9月27日、アウンサン、テインペー、ミャー AFPFL の幹部6名を含む新しい行政参事会を設けた。⁴²³⁾AFPFL は、ビルマ独立に関する4項目の要求を総督に提出した。⁴²⁴⁾そして12月20日、アトリー首相はビルマの行政参事会代表をロンドンに招いて討議を行なうと発表した。⁴²⁵⁾翌47年1月7日、アウンサン以下6名の代表団がロンドンに向かい、同月27日制憲議会開催のための4か月以内の選挙の実施、行政参事会の「暫定内閣」としての承認、自治領とし

410) Mg Mg (1969), p. 263; Htin Aung (1965), p.116; Htin Aung (1967), p.304.

411) U Hla, *Postwar Burma*, pp.123-124, pp. 140-142.

412) Collis, pp. 253-254; Foucar, p. 185; Mg Mg (1958), p. 105; Desai, p. 274; Trager, p. 66, 矢野, p. 355.

413) U Hla, *Postwar Burma*, p. 154.

414) Collis, p. 237; Donnison, p. 131; 矢野, p. 359

415) U Hla, *Postwar Burma*, p. 165, 169.

416) AFPFL で選んだのは、アウンサン、タキン・ミャ、タキン・テインペーら11名。U Hla, *Postwar Burma*, p. 183; Mg Mg (1961), p. 72.

417) Collis, p. 257, 523; 矢野, p. 360.

418) 総督は AFPFL 推薦の11名中7名だけを承認。テインペーには難色を示した。U Hla, *Postwar Burma*, p. 184; Mg Mg (1958), pp. 107-108; Mg Mg (1961), p. 72; Cady, p. 524.

419) Foucar, p. 192; Cady, p. 524; Mg Mg (1961), p. 72; Desai, p. 275; Trager, p. 70.

420) U Hla, *Postwar Burma*, pp. 199-200.

421) AFPFL のウー・バペー、アウンサン、タントゥン、ソーバウーヂーの4名は拒否した。U Hla, *Postwar Burma*, p. 286.

422) Collis, p. 281; Cady, p. 531; 矢野, p. 366.

423) Collis, p. 283; Foucar, p. 193; Cady, p. 538; Desai, p. 275; Mg Mg (1958), p. 109; Mg Mg (1961), p. 76; Trager, pp. 75-76; Htin Aung (1965), p.119; Htin Aung (1967), p. 305.

424) Donnison, p. 133; Cady, p. 539.

425) Collis, p. 284; Foucar, p. 193; Cady, p. 539; Desai, p. 275; Trager, p. 122; Htin Aung (1965), p. 122; Donnison, p. 133.

ての待遇などを骨子とした「アトリー・アウンサン協定」が調印された。⁴²⁶⁾ こうしてビルマの独立が約束された。

こうした政治的情勢を背景に、一方では“ビルマ軍”の処遇問題が大きくクローズアップされてきた。「はじめ日本軍によって組織され、今では日本軍と戦っている」⁴²⁷⁾ BNA をどう取り扱うか、英軍当局にとってはもともと問題であった。イギリスの軍政当局者の間には、“ビルマ軍”の存続について最初賛否両方の意見があった。バモー同様、アウンサンも要逮捕人物表のトップにいた。民政部のピアース少将からは、“戦犯”アウンサンの即時逮捕要求が出されていた。しかしそうした措置は、ビルマ人の反英感情を尖鋭化させ、内乱を惹き起こすおそれがあるという理由で、東南アジア方面軍司令官マウントバッテンによって退けられた。⁴²⁸⁾

45年5月16日、アウンサン將軍はフラアウン少佐を連れてアウンランからメイティーラーに出て来た。彼はそこではじめて、連合軍のスリム將軍に会った。⁴²⁹⁾ アウンサンにとって、独立闘争の主要な武器は言うまでもなく“ビルマ軍”であった。彼は、その解体には強く抵抗するつもりだった。⁴³⁰⁾ところがこの時の会談によって幸にも、連合軍はBNAを承認する、BNAは連合軍司令官の指揮下に入る、連合軍はBNAに武器食糧を補給するということになった。⁴³¹⁾ マウントバッテンは次のように述べている。「45年5月30日、我々は兵站司令部で会議を開いた。ドーマン・スミス、リース中將、ストッフフォード中將、スリム中將、ランス中將などが出席した。席上、アウンサン少將の率いるビルマ軍の行動を承認し、併せて“ビルマ愛国軍”(PBF)とよぶことに同意した。」⁴³²⁾同時に、ビルマ總督のドーマン・スミスも、PBFの政治活動を抑圧しない旨明らかにした。⁴³³⁾ “ビルマ軍”はこうして、6月15日のラングーンの勝利パレードに参加、同月29日からは“ビルマ愛国軍”(PBF)と名を改めた。⁴³⁴⁾

8月19日、戦後はじめての人民大会がAFPFLの主催で開かれた。⁴³⁵⁾ 「ネートゥーイェイン会議」とよばれるこの時の大会で、AFPFLの中央執行委員36名が決められ⁴³⁶⁾、委員の一人ディードウ・ウーバチョウからPBFの地位に関する提案がなされた。⁴³⁷⁾ これは同月12日ラング

426) Hla Myo, p. 228; Collis, p. 285; Cady, p. 541; Tinker, p. 223; Mg Mg (1958), pp. 187-191; Mg Mg (1961), pp. 77-78; Htin Aung (1965), p.122; Trager, p. 78.

427) Trager, p. 69.

428) Hpon Kyaw, p. 196; Cady, pp. 513-514; Trager, p. 71.

429) U Hla, vol. 4, p. 261; Collis, p. 238; Mg Mg (1969), p. 246; Trager, p. 69.

430) Donnison, p. 128.

431) Collis, p. 238; Cady, p. 504; Mg Mg (1969), p. 241.

432) U Hla, vol. 4, pp. 261-262; Mg Mg (1969), p. 247.

433) Cady, p. 504.

434) U Hla, vol. 4, pp.262-263; Hpon Kyaw, p.194; Collis, p. 244; Cady, p.504, 511.

435) U Hla, vol. 4, p.228.

436) *Ibid.*, p. 229.

437) *Ibid.*, p. 253; Hla Myo, p. 331.

ーンで開かれた PBF 管区軍司令官会議の席上決定された内容と同じで、次の5項目から成っている。⁴³⁸⁾

- 1) 新しい軍隊の早急な結成
- 2) 連合軍指揮下にある少数民族部隊の新軍への合体
- 3) ビルマ人大隊, 少数民族大隊の個別的編成
- 4) PBF 幹部と新軍幹部との合同委員会設置
- 5) PBF および連合軍指揮下の少数民族部隊に対する謝辞

9月4日, PBF の指揮官 および AFPFL の幹部である アウンサン, レッヤー, ネーウィン, ゼーヤ, マウンマウン, チョーゾー, ゴーミン (現マウンマウンチョーウィン准将), ウー・バペー, タキン・タントウン, コウ・ニョウトウン, ソー・バウヂーの11名が, マウントバッテンの招きにより セイロンのカンディーに赴いた。⁴³⁹⁾そこで, 彼らは マウントバッテン, スリムなど連合軍の司令官達に会った。9月6, 7, 8の3日間, PBF の処遇問題が討議され, 「PBF の兵士 5,000, 将校200, 計 5,200を新設の「ビルマ軍」に受け入れる。希望者があればさらに300名余分に受け入れてもよい。ただし, PBF 全員を受け入れるわけではない」など, 9項目の合意が得られた。⁴⁴⁰⁾

45年9月から12月までの3か月間, 「ビルマ軍」は PBF と称していたが, 部隊はすでに消滅していた。PBF の兵士達は, 武器を英軍に引き渡して郷里に帰って行った。⁴⁴¹⁾旧 PBF の兵士に対する新軍の募集公示は, 11月30日ビックフォードの名前で行なわれた。⁴⁴²⁾

ビルマ愛国軍兵士に対する呼びかけ

- 1) ビルマ国軍連隊本部 メイミョウ
- 2) ビルマ国軍連隊本部 ミインヂェン
- 3) ビルマ国軍連隊本部 メイティーラー
- 4) ビルマ小銃第5大隊 ビインマナー
- 5) ビルマ小銃第4大隊 プローム
- 6) ビルマ小銃第3大隊 シリアム
- 7) ビルマ国軍第1情報部 タボイ
- 8) ビルマ国軍第2情報部 タウンゴウ

申請希望者は1946年1月1日から2月28日までの間に連絡すること。

ビックフォード

438) Hla Myo, pp. 331-332; U Hla, vol. 4, pp. 253-254, pp. 312-3; U Hla, *Postwar Burma*, p. 42.

439) Hpon Kyaw, p. 201; U Hla, vol. 4, p. 321; U Hla, *Postwar Burma*, p. 91; Han Tin, pp. 95-96; Bo Thein Swe, p. 194; Collis, p. 249; Desai, p. 274; Trager, p. 67; Mg Mg (1961), p. 67, 69; Mg Mg (1969), p. 256.

440) Tinker, p. 326; Mg Mg (1961), p. 69; Bo Thein Swe, p. 195. カンディー協定の細目は, Hla Myo, p. 226; U Hla, *Postwar Burma*, pp. 99-104 などにある。

441) Bo Than Daing, pp. 513-516.

442) U Hla, *Postwar Burma*, p. 232.

新軍の編成は急ピッチで進められた。カレン、カチン、チンなどの少数民族による小銃3個連隊と共に、全員ビルマ人兵士だけで成るビルマ小銃5個大隊が編成された。⁴⁴³⁾ アウンサン將軍は、マウントバッテンから“準将”として新軍にとどまることを要請されたが断わった。⁴⁴⁴⁾ ボウ・レチャーは大佐として監察副總監に、ボウ・ネーウィンは大佐として大隊長に就任した。⁴⁴⁵⁾ ボウ・チョーゾー、イェートウツ、ゼーヤ、バラなども、少佐として新軍に加わった。⁴⁴⁶⁾ 新しい軍隊の中核は、45年3月に編成された歩兵大隊のビルマ小銃第2大隊であったが、これはカチン、カレン、チンの兵士が各々三分の一ずつを占める混成部隊であった。⁴⁴⁷⁾ PBFの旧兵士のみで構成される5個大隊は、第1、第3、第4、第5、第6の小銃大隊であった。⁴⁴⁸⁾

新設された“ビルマ国軍”の中には、社会主義者の多い部隊、共産主義者の多い部隊といった色分けが目立った。ネーウィン大佐の指揮する第4大隊(ティンペー、アウンダー、マウンマウンらが所属)は、“社会主義大隊”とよばれた。⁴⁴⁹⁾ PBF時代、管区司令官、大隊長などをしていた人は、第4大隊では尉官になった。ボウ・ティンペー、マウンマウン、アウンダーらは管区司令官であったし、ボウ・チョーソウ、ソウナイン、ミャタウンらは日本の陸軍士官学校出身者であった。BIA、BDA以来のボウ・チョーウィン(現中佐)、エーマウン(大佐)、タンセイ(大佐)、バタン(大佐、退役)、サンチー(大佐)などは将校になった。⁴⁵⁰⁾ けれども、新軍の将校定員が少ないため、BIA、BDA時代の将校の中には下士官になる者もいた。⁴⁵¹⁾ フラモウ(現中佐)、フラマウン(中佐)、イェーガウン(中佐)、エーコウ(大佐)、フラポン(大佐)、グンシェイン(大佐、退役)などは、こうして参加した人達である。⁴⁵²⁾

再編された新しい軍隊の中には、PBFから来た兵士と英軍指揮下にあったチン、カチン、カレン、シャンなど民族別編成部隊の兵士とが、混在していた。⁴⁵³⁾ PBFは、ビルマ独立軍(BIA)→ビルマ防衛軍(BDA)→ビルマ国軍(BNA)の後身であり、組織も装備も訓練方法もすべて日本陸軍をモデルとしていた。⁴⁵⁴⁾ 一方、少数民族部隊は戦前から存在していた部隊で、大戦中は連合軍の配下にあった。こうした歴史的背景を異にする二つの全く異質な軍隊の合体によって発足したこの新しい“ビルマ国軍”は、発足当初から当然内部的融和性を欠いていた。⁴⁵⁵⁾ 新し

443) Bo Than Daing, p. 514; Tinker, p. 321.

444) Mg Mg (1969), p. 256.

445) *Ibid.*, p. 258.

446) Sein Tin, p. 198.

447) Tinker, p. 320.

448) *Burma and the Insurrections*, p. 9; Tinker, p. 321.

449) Mg Mg (1969), p. 261.

450) *Ibid.*, p. 262.

451) *Ibid.*, p. 258.

452) *Ibid.*, p. 262; Mg Mg (1968), p. 262.

453) Mg Mg (1969), p. 306.

454) 矢野「ビルマの政治的不安定(Ⅱ)」p. 63.

455) Mg Mg (1961), p. 140.

い軍隊では、カレン人部隊、カレン人将校が幅を利かした。参謀長スミス・ドゥン、空軍司令官ソー・シーショウ、作戦主任参謀ソー・チャードウ、いずれもカレン人であった。⁴⁵⁶⁾ こうした二組織の寄せ集めが、独立直後勃発した内乱とともに、国軍解体の危機をもたらす遠因となる。

参 考 文 献

(英 文)

- Ba Maw. 1968. *Breakthrough in Burma*, Yale U. P.
 Bisheshwar Prasad. 1959. *Reconquest of Burma*, vol. II, Calcutta.
 Butwell, Richard. 1963. *U Nu of Burma*, Stanford U. P.
 Cady, John F. 1958. *A History of Modern Burma*, Cornell U. P.
 Collis, Maurice. 1956. *Last and First in Burma*, London.
 Desai. 1961. *A pageant of Burmese History*, Calcutta.
 Donnison, F. S. V. 1970. *Burma*, London.
 Foucar, E. C. V. 1956. *I Lived in Burma*, London.
 Government of the Union of Burma. 1949. *Burma and the Insurrections*, Rangoon.
 Htin Aung. 1965. *The Stricken Peacock*, The Hague.
 _____. 1967. *A History of Burma*, Columbia U. P.
 Maung Maung. 1958. *Burma in the Family of Nations*, Amsterdam.
 _____. 1961. *Burma's Constitution*, The Hague.
 _____. 1969. *Burma and the General Ne Win*, Bombay.
 Matthews Geoffrey. 1966. *The Re-conquest of Burma*, Aldershot.
 Thakin Nu. 1954. *Burma under Japanese*, London.
 Tinker, Hugh. 1961. *The Union of Burma*, Oxford U. P.
 Trager, Frank N. 1966. *Burma from Kingdom to Republic*, New York.
 U Ba U. 1959. *My Burma*, New York.

(ビルマ文)

- Ba Thaung, Bohmu. 1967. *Bama Tawhlanye Thamain*, Rangoon.
 Bo Htun Hla. 1955. *Bogyok Aungsan*, Amsterdam.
 Bo Kyaw Zaw. 1961. *Amyoda Lutmyaukye Taikpwemya*, Rangoon.
 Bo Min Gaung. 1968. *Bogyok Aungsan hnit Yebaw Thongyeit*, Rangoon.
 Bo Min Nyo. 1969. *Japan Hkit Sittekkado*, Rangoon.
 Bo Than Datng. 1967. *Lutlatye Ayedawbon Hmattan*, Rangoon. vol. I & II
 Bo Thein Swe. 1967. *Lutlatye Taikpwe*, Rangoon.
 Han Tin, Sagain. 1964. *Lonwa Lutlatye tho*, Rangoon.
 Hla Myo, Yebaw. 1968. *Pyihtaungzu Myanmanaingan Thamainwin Sagyok Sadanmya*, Rangoon.
 Hpon Kyaw, Natmauk. 1968. *Thamainwin Hsaungbamyā*, Rangoon.

456) Mg Mg (1961), p. 141; Mg Mg (1969), p. 306.

- Maung Maung. 1969. *Myanma Nainganye Hkayi hnit Bogyok Ne Win*, Rangoon.
- Maung Soe Maung. 1955. *Wungyigyok U Nu*, Amsterdam.
- Sein Tin, Tekkadoe. 1968. *Yebaw Thongyeik Mawgun*, Rangoon.
- Thakin Lwin. 1969. *Japan Hkit Bamapyi*, Rangoon.
- Thakin Nu. 1946. *Ngahnit Yadi Bamapyi*, Rangoon.
- Thakin Tin Mya. 1968. *Hpetsit Tawhlanye Htanagyok hnit Tain Tahse Tain*, Rangoon.
- 1968. *Bonbawa hma hpying*, Rangoon. vol. V.
- Thein Hpe Myint, U. 1968. *Sit Atwin Hkayide*, Rangoon.
- U Hla, Ludu. 1968. *Thadinzamy Pyawpyade Sittwing Bamapyi*, Mandalay. vol. I, II, III, IV.
- 1969. *Thadinzamy Pyawpyade Sitpyiza Bamapyi*, Mandalay.

(邦 文)

- 太 田 常 蔵 1967『ビルマにおける日本軍政史の研究』東京
- 泉 谷 達 郎 1967『ビルマ独立秘史』東京
- 防衛庁防衛研修所戦史室 1967『ビルマ攻略作戦』東京
- 『秘録大東亜戦史ビルマ篇』1953 東京
- 矢 野 暢 1968『タイ・ビルマ現代政治史研究』京都大学東南アジア研究センター
- 「ビルマの政治的不安定」『法学論叢』第75巻第2号
- 大 野 徹 1967「アウンサン将軍(Ⅱ)」『鹿大史学』第15号